

# Glocal Tenri



11

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.11 No.11 November 2010

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

## CONTENTS

- ・ 巻頭言  
心の垣根を取り払って・・・  
／深谷忠一 ..... 1
- ・ 天理教教理史断章 (59)  
その他の文書②  
／安井幹夫 ..... 2
- ・ 天理教海外伝道の資料 (11)  
上海伝道関連史料⑩  
／深川治道 ..... 4
- ・ 天理異文化伝道の諸相 (74)  
コンゴ伝道に見る異文化接触 [40]  
／森 洋明 ..... 5
- ・ 今日の時代における宗教批判の克服学 (23)  
真理を求めてやまない愚かさ  
／金子 昭 ..... 6
- ・ 「二つ一つ」の環境学 (36)  
野生生物の多様性と保全②「国連地球生きもの会議」は成功するか？  
／佐藤孝則 ..... 7
- ・ ハワイ人とキリスト教：文化と信仰の民族誌学 (20)  
太平洋諸島のキリスト教①  
／井上昭洋 ..... 8
- ・ 天理スポーツ (6)  
相撲と天理②  
／難波真理 ..... 9
- ・ 宗教・国際協力・NGO (22)  
一食平和運動の歩み②  
／野口 茂 ..... 10
- ・ 現代ジェンダー論展望 (13)  
女性学に対する男子学生の違和感  
／金子珠理 ..... 11
- ・ 図書紹介 (56)  
宗教のポリティクス 日本社会と一神教世界の邂逅  
／堀内みどり ..... 12
- ・ English Summary ..... 13
- ・ おやさと研究所ニュース ..... 14  
平成 22 年度公開教学講座「現代社会と天理教」(1)  
／第 230 回研究報告会／天理大学・マールブルク大学共同プロジェクト II／WCRP まほろば大会にパネリストとして参加

## 巻頭言

### 心の垣根を取り払って・・・

おやさと研究所長 深谷忠一 Chuichi Fukaya

先日、妻の女子高時代からの友人一家が、我家を訪ねてくれました。妻の友人は彼女がアメリカ留学中に会った白人男性と結婚。その新婚旅行で一度我が家にきてくれた時以来、ご夫婦としては 42 年ぶりの天理。同行の娘さん夫婦と 3 人のお孫さんにとっては初めてのおぢばがえりでした。

お互いに年賀状のやりとりはあり、友人が東京の実家に帰った時は電話もしてくれるし、20 年位前には小生らが渡来して出会うもいるのですが、顔を合わせて話をするのは全く久しぶり。奥様方の話は、あの時はこう、その時はこうだった等々延々と続けました。

そして、その話の中でも特に興味深かったのは、友人一家が次々に移住した国々所々での生活ぶりでした。彼女たちは新婚当初はジョージア州のアトランタに住んでいましたが、間もなく宝飾品関係の仕事をするために香港に移住。それから数年してサンフランシスコ郊外のアラメダに家を買って移住。それから、フロリダのオーランドに移って数年。次に南米はアルゼンチンに移住し、電話会社を買収して、3 年くらいの生活。それから一度フロリダに戻ったものの、またすぐにカリブ海のケーマン島に移住。そして数年後にまたフロリダに戻って、今はディズニワールドの近くの小さな町に住んでいるというのです。

しかるにそれで終わりかと思えば、次はハワイに移り住む計画。これまで住んだ所はそれぞれ観光に訪れるのに良い所で、双方の親族や友人たちが喜んで遊びにきたけれど、皆だんだん年を取ってきて、フロリダでは東京からは遠すぎる。ハワイなら日本と米本土との間で、どちらの親族・友人も気軽に飛んで来れるから、いずれはハワイに移るつもりだと言うのです。

また、彼女の娘さんは、香港やカリフォルニアで幼少期を過ごし、その後、東京の大学を卒業してから、アルゼンチンの大学院で修士号を取得。英語、日本語、スペイン語のトリリンガルに加えて中国語も話ができる。彼女の日本語は聞いていても外国人を感じさせないし、英語もネイティブの英語がスラスラと出てきます。母親たちの会話は、最初は皆

に気がつかって英語を使っているものの、熱がこもってくると自然に日本語になる。そうすると、彼女が日本語をあまり解さないお父さんやご主人に適度に通訳をして、その場の雰囲気なごやかにする気遣いをする。父親やご主人と英語で会話をすればアメリカ人になり、母親や家内や小生と話をする時は自然に日本人どうしの会話になる。日英どちらの言葉になっても何の違和感もないのです。彼女は、独身の時はある国際企業のキャリアウーマンだったのですが、飛行機の操縦免許を取得するために通ったフライングスクールの教官だった今のご主人と結婚してからは、普通の専業主婦に納まって、3 人の子育てに専念しているというのです。

小生自身は、これまでに多くの国際結婚の顛末を見聞きしてきた結果、“人種・文化・言語等の違いはそう簡単には乗り越えられない”という印象を強く持っておりました。しかし、そのような違いを気にすることもなく、自らのアイデンティティ云々もさして問題にせず、どこに住んでもその土地所での生活を楽しんで、自然体で暮らしてきたこの一家の様子に接して、“人は誰でも皆、確たる母国や母国語を持たないと、人生の拠り所を失って根無し草になる”という小生の日頃の主張も、再点検が必要かなと思われたのでありました。

ある宇宙飛行士が「宇宙から見た地球には、国境線は引かれてなかった」と言ったように、“此所からこっちは自分たちの国、外国人は入ってはいけません”などという線引きは、人間が勝手にやっていることです。鳥や魚などはそんな線引きには全く関係なく往来します。

私たちはすぐに“国や人種が違う、言語や文化が違う”などと言うけれども、そんな違いは、実は、簡単にスーツと乗り越えられるのかも知れない。それが出来ないのは、自分たちが勝手に彼我は違うという線引きをして、心の垣根を作っているからだろう。“一れつ兄弟”を標榜する我々道の者こそ、世界の何処の国にでも自由に出向いて、誰とでも仲良く生活しなければ・・・。そう感じた国際人一家との数日でした。